

P-279 IVF-ETにおける化学的流産の原因的解析—移植胚および子宮内膜を中心として—

琉球大、

當間 敬、神山 茂、宮城博子、金澤浩二、

【目的】IVF-ETの流産には内膜の不良状態が関与していることを報告している。そこで今回は、IVF-ETの化学的流産（hCG陽性的流産）の原因が、移植胚そのものにあるか、これを受け入れる側の内膜にあるかについて、臨床的流産（胎嚢確認的流産）と比較し検討した。【方法】1988.1～1998.7の期間に施行したIVF-ETにおいて胚移植まで施行した1,382周期中、尿中hCG25単位陽性的の化学的流産（化学的）69例と、胎嚢確認的の臨床的流産（臨床的）56例を対象とし、年齢、移植胚数、良好移植胚数、胚移植時内膜厚および胚移植5日目黄体ホルモン値等を比較検討した。また子宮鏡によるIVF-ET前内膜所見との関係についても検討した。【成績】①平均年齢は化学流群:37.4±5.0歳、臨床流群:36.2±4.8歳であった。②平均移植胚数は化学流群:2.6±1.1個、臨床流群:3.1±1.3個（ $p<0.05$ ）であり、また平均良好移植胚数は化学流群:1.7±1.3個、臨床流群:2.3±1.3個（ $p<0.05$ ）であった。③一方、胚移植時内膜厚は化学流群:10.4±1.8mm、臨床流群:11.1±2.2mm（ $p>0.05$ ）であり、胚移植5日目黄体ホルモン値は化学流群:33.6±26.6ng/ml、臨床流群:93.2±73.3ng/ml（ $p>0.05$ ）であった。また子宮鏡的内膜良好群での胚移植時内膜厚は化学流群:10.7±1.5mm、臨床流群:11.0±2.1mm（ $p>0.05$ ）であり、内膜不良群では化学流群:9.9±1.7mm、臨床流群:10.8±2.0mm（ $p>0.05$ ）であった。【結論】IVF-ETにおける流産のには、内膜の状態のみならず、移植胚、良好移植胚の数も重要な原因的因子となっていることが示唆された。

P-280 キニノーゲンにおけるフォスファチジルエタノールアミン結合部位の同定

東海大

勝沼潤子、杉 俊隆、内田能安、岩崎克彦、
牧野恒久

【目的】近年、抗リン脂質抗体と血栓症、反復流産との関係が注目を浴びている。電気的陰性リン脂質に対する抗体の多くはリン脂質に結合した β_2 -glycoprotein I (β_2 GPI)やprothrombinを認識し、電気的中性のリン脂質であるフォスファチジルエタノールアミン (PE) に対する抗体の多くはPEに結合したkininogenを認識することが最近になって解明された。 β_2 GPI上のリン脂質結合部位は1994年に同定されたが、kininogenのリン脂質結合部位は不明であった。今回我々は、抗PE抗体陽性患者血清と合成ペプチドを用いてkininogenのリン脂質結合部位を同定した。【方法】合成ペプチドは synthesizer で合成し、HPLCで精製後 sequencerで確認した。また、抗PE抗体陽性患者血清は、インフォームド Consentのもとで採取し、ELISA法により測定し、さらに精製したkininogenを用いてその特異性を確認した。すなわち、PEに結合したkininogenを認識する抗PE抗体と、PEそのものを認識する抗PE抗体の2種類が用意された。それらを用いて、PEを固相化したELISA上で抗PE抗体とkininogen合成ペプチドの競合阻害を観察した。【成績】kininogen, Domain 3上のCys³³-Cys³⁵²がPEに結合することが解明された。また、そのなかでもCys³³-Lys³⁴⁵が結合部位と思われた。この部位は、kininogenの血管内皮細胞結合部位と同じである。【結論】kininogenは血管内皮細胞に結合し、抗凝固活性をもっているが、血管内皮細胞上のkininogen receptorは不明である。今回の我々のデータより、kininogenは血管内皮細胞膜外層のPEに結合することが強く示唆され、抗PE抗体の内皮細胞を介する病原性が示唆された。